

井上 浩義

Inoue Hiroyoshi

(慶應義塾大学医学部 医学部病院放射線安全管理室・室長/化学教室・教授)



近年、若い世代の方々とお話をさせていただくと、仕事の意義や生活指向をウェルビーイングや社会的結束、持続可能性などに置いておられることに驚かされると同時に我が身を恥じます。筆者などは若い頃は高い給与を目指し、少しでも偉くなろうと必死でした。この年齢になると“偉い”って何だろうと懐疑的な気持ちになりますが、若い頃はなぜか漠然とそう考えていました。筆者の若い頃が社会的に平穏だった訳ではありません。筆者は福岡出身ですが、小学生の頃までは福岡空港は米軍が接收し、管制も米軍が行なっていました。近郊に目を向けると水俣病やカネミ油症問題などの公害が日々耳目を集め、長崎の親類を訪れると多くの方が原爆の経験を生で語ってくれました。それでも筆者の価値志向は前者のようなものでした。そして、放射線教育においてもこの生涯的な価値変化が影響を与えるようになりました。つまり、放射線教育も従来の市場原理に基づくダウンストリーム型教育では、受け手の共感が得られなくなりました。

筆者らはこれまで10万人以上の人たちを対象に放射線教育を行ってきました。ちょっと多く見積もり過ぎじゃないのとの声が上がりますが、これは高校等での講演が300校以上あるためです。本当の意味での“仲間”はディベートや環境放射能測定会などで密な関係を築き、現在のOB/OG会を構成している500名程度です。筆者らはこのOB/OG会の皆さんと放射線教育を行っています。筆者らは、放射線の理解は、社会的認知と科学的理解が相伴って階層的に認知されていくことが望ましく、最終的には、両者を統合的に整理し、一定の抽象化を施して提示することで、多様な論点に基づく議論を促進できるとの考えのもと、放射線教育を実践してきました。現存する先端技術あるいは将来にわたって発見・発明されるであろう最先端技術は、技術の影響範囲が拡大するほど、技術的限界および倫理的課題がより明瞭に顕在化すると考えられます。これは、放射線だけでなく、遺伝子治療、再生医療、宇宙開発など例を挙げてもありません。このために筆者らはこれまでの放射線教育では(1)教科・科目を超えた問題提示型学習を可能とする、(2)生涯学習型教育を可能とする、(3)タブーを作らない学習を提示できる、(4)ディベート機会を創造できる、そして(5)教材の対象を公共的課題へ拡張し、価値観の違いがある問題で合意を形成する力を養うことに注力してきました。しかし、これではまだ不十分です。例えば、少子高齢化が進む我が国では上記の「生涯教育」だけを唱えるだけでは不足です。若い世代には「世代間の相互理解の促進や給付拡充」ではない「持続的な稼働力の向上」などについて、受動的な知識習得にとどまらず、社会的、倫理的課題を自ら問い直し、他者との対話を通じて理解を深める教育が必須となります。そうです。筆者らの従来の放射線教育は、現状に即していたとは言い難く、抜本的な見直しを要するものでした。筆者らは放射線教育に世代を超えて共有できる新しい価値の創造と責任を背負う立場について学ぶ場を設けなければいけません。正解を与えるのではなく、論点を育成する教育が必要なのです。そして、最終的には共通善を共感する「新しい社会契約」としての放射線教育が求められていると考えています。